

令和5年3月末、会津若松市中心部で20年間続けていた私設図書館「絵本文庫 やまぼうし」が閉館になりました。

中学校の国語教師だった友人が、定年退職後に6000冊の絵本のみを集めて開館した図書館で、この図書館を開くために自宅を市の中央部に移転・新築し、一階を図書館として広く市民に開放しました。

戸を開けると、世界中の絵本が壁一面の書架や、子ども目線を考えた面展示として配架されています。

土曜日だけの週一日開館ですが、貸出冊数の制限も貸出期間のきまりもなしの、ゆるい図書館です。もちろん、公共図書館のような身分証明書の提示の必要もなし。おしゃべり大歓迎の、居心地のとても良い空間でした。

開館当初は多くの子どもたちで賑わっていて、お話会や読み聞かせの行事も実施していましたが、東日本大震災後は、子どもの利用が激減しました。反対に大人の利用者がとても多くなり、読み聞かせボランティアや朗読をしているグループが本を選び借りていくことが多くなりました。最近は、本や絵本の話をしたり、人生や生活の話になったり、情報交換の場として利用されたりと、多くの大人が開館日を楽しみにして集う光景が見られた図書館です。

このような子ども文庫は、1960年代から急激に全国に広まり、戦後長い間、公共図書館を上回る数で存在しました。日本の子どもたちの読書を、実質的に大きく支えてきた文庫は、海外でも注目を集めるユニークな活動として日本社会の中に深く根を下ろしてきました。

子ども文庫の数が最大4406になったのが1980年代です。それが、2013年には1215になってしまい、現在ではもっと少ない数になっていることと思います。

会津地域にも、過去には多くの子ども文庫がありました。最盛期には40以上の文庫が開かれて、多くの子どもの読書を支えました。

公共図書館が充実し、少子化や、子どもの生活が塾やお稽古事でいそがしくなり、ファミコンゲームが入ってくると文庫利用者が少なくなり、文庫を閉じるところが多くなりました。現在、こうした文庫は絶滅危惧種のような存在になってしまっています。

「絵本文庫 やまぼうし」は個人の開いた図書館ですが、手伝ってくれるスタッフにも恵まれ、20年間ずっと、閉館する日もなく運営されてきました。新刊購入に年金を充てて、魅力的な蔵書にしてくれたことも、利用者が多かった理由だと感じています。

この文庫の蔵書全冊を引き取り、趣旨も同じく開館したいという後継者が出てくれたことに、関係者一同、安堵しているところです。

自宅のガレージをリフォームして、「絵本文庫やまぼうし」の名も引継ぎ、5月開館を目指して準備中です。前の館主よりも二世代若い人なので、今後20年くらい続けてくれるだろうと希望が持てます。

少子化、高齢化がますます進んでいくので、赤ちゃんからご高齢の方まで誰でも集える場・サロンのようなところを作りたいと夢を持っている後継者です。周囲の人々と協力しながら、この文庫を魅力ある場、地域で必要とされる場となるよう、支えていければと思っています。

ひとりの思い付きで始まった文庫が、20年を経て次にリレーされ広がっていく。とても素敵なことだと思います。